



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	児童の視空間性ワーキングメモリの発達特性と教育支援に関する検討( 審査結果の要旨 )
Author(s)	堂山,亞希
Citation	
Issue Date	2015-03-17
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/139032">http://hdl.handle.net/2309/139032</a>
Publisher	
Rights	

## 審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

ワーキングメモリ研究は、数多くの基礎研究が蓄積され、実践研究へと発展している。しかし、日本の学校教育において、知能検査（WISC-IVなど）を用いて児童生徒の認知機能を把握することが普及してきているが、アセスメントによってワーキングメモリの低さが明らかになった児童生徒がいたとしても、ワーキングメモリそのものに着目した支援は定着しておらず、具体的な教育支援の方法に関する研究は十分に行われていない。また、既存のワーキングメモリ・アセスメントは、活用上に様々な問題があり、日本の学校教育に適したアセスメントツールを作成する必要がある。そこで、本研究は、ワーキングメモリのアセスメントバッテリーを開発し、児童のワーキングメモリにおけるつまずきを評価・把握するとともに、ワーキングメモリに着目した支援方法のあり方を教育実践的な視点に基づき検討した点で、教育心理学や特別支援教育における先駆的な意義を有している。また、教育的支援の研究として、フィールド調査による支援ニーズの把握、実験による基礎的検討、事例による支援方法の臨床的検討という包括的な研究を展開した点でも、臨床教育学における意義を有している。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究において、ワーキングメモリと学校適応や学習活動との関連を明らかにし、ワーキングメモリに関連する教育的ニーズを包括的に把握するため調査研究を展開した。対象は、①通常学級に在籍する児童とその保護者、および担任教師、②特別支援学級に在籍する児童とその担任教師であり、個人情報保護及び研究倫理規定などを踏まえながら、質問紙調査とデータの整理・分析・考察がなされている。また、幼児期・児童期における視空間性ワーキングメモリの発達の経過とつまずきの特徴を把握するため、実験研究を展開した。対象は、①定型発達児、②学習活動につまずきのある児童とその保護者であり、個人情報保護及び研究倫理規定などを踏まえながら、実験を実施し、データの整理・分析・考察を行った。加えて、上記の調査研究・実験研究で得られた知見を基に、学習活動につまずきのある児童らを対象に、アセスメントと支援の実践を通して、有効なワーキングメモリアセスメントバッテリーとワーキングメモリに着目した支援を導き出し、実証性の高い支援検証研究を実施した。以上のように本研究は、教育心理学や特別支援教育の教育実践研究において、量的研究として十分な水準にあり、さらに質的研究においてもエビデンスレベルの高い方法がとられ、該当研究分野において妥当性が高く評価される。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本研究では、個人情報保護・研倫理規定を踏まえた調査・実験の計画と実施、データの収集・統計的手法による分析、および結果の公表と社会還元が不可欠であるが、それらは適切になされている。また、ワーキングメモリに着目した学習・行動上につまずきのある児童への支援事例では、開発したアセスメントバッテリーにより児童のワーキングメモリ特性を多角的に評価し、個々のワーキングメモリ特性に合わせた支援を行うという一連の支援方法を導き出し、長期間にわたる支援の経過の詳細な分析と効果測定を適切に行ったことが認められる。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本研究では、ワーキングメモリは学校生活上のあらゆる行動に影響し、ワーキングメモリの弱さが学校生活全般における困難を生じさせる一因となると考えられ、ワーキングメモリに着目した支援を行う必要性は高いと考察された。また、幼児期から児童期の子どものワーキングメモリ特性は、強み、または、つまずきの個人差が大きく、そのような個人差を精査することによって、個々のワーキングメモリ特性に合った支援を検討できると考察された。以上の考察は、客観的な手続き、分析方法に基づいて導き出されたものであり、論理的にも妥当である。さらに、本研究結果は、今後、臨床教育学の研究などの様々な分野で運用されることが期待され、十分な学術的水準に達していると評価される。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

今日の学校教育において、学力や認知機能のアセスメントに基づいた支援が定着しつつあるが、ワーキングメモリに着目した支援は少なく、支援の効果研究も殆ど行われていないのが現状である。本研究では、個々のワーキングメモリ特性を明らかにするアセスメントバッテリーを開発し、ワーキングメモリに配慮した支援方法を検討した。その結果、ワーキングメモリに着目した支援において、実験課題を用いて個々のワーキングメモリ能力を測定する課題ベースのアセスメントとチェックリストを用いて行動観察を実施する行動ベースのアセスメントを併用することによって、個々のワーキングメモリ特性を多角的に捉えることができることが示唆された。また、ワーキングメモリの能力をトレーニングする支援ではなく、詳細なアセスメントに基づいたワーキングメモリに配慮した支援を行うことによって、より短期的な効果が期待できることが示唆された。これらの研究成果は、アセスメントに基づいた支援に関する臨床教育学的研究のさらなる発展に寄与するものとして、学問的意義が高いと認められる。加えて、本申請者は研究成果の一部を国際会議（第3回アジア太平洋発達障害会議2013）において発表を行い、行動・学習上につまずきのある児童への支援の一翼を担う教育支援者の役割について発表したことは特筆すべき事項である。

以上の点を総合的に判断し、審査委員会は全員一致して、本研究が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）学位授与に十分に相応しい優れた研究であると評価した。